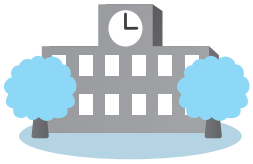


進学、就学を応援します！

問い合わせ…教育総務課総務担当　TEL 224-6074

■育英資金 ～借り入れ申し込み案内～

来年4月から、高等学校・中等教育学校(後期課程に限る)・高等専門学校・短期大学・大学・専修学校に進学する方または在学中の方で、経済的に学資金などの支出が困難な方に、無利子で資金をお貸しします。

申請することができる方(次の要件をすべて満たす方)

①市内に引き続き6か月以上在住している　②経済的理由で、学資金や入学準備金の支出が困難である
③心身健全で、かつ学業成績が良好である　④学校長の推薦を受けられる

償還期間…貸付期間の2倍(償還開始は卒業6か月後から)

提出書類…①学資金・入学準備金借入申請書　②校長の推薦書　③成績証明書　④健康診断書
⑤住民票の写し(世帯全員のもの)　⑥合格通知書の写し　⑦保護者の平成30年度課税証明書

＊①②の用紙は、教育総務課・市立中学校に用意してあります。市ホームページからダウンロードもできます。
(ホームページ＝http://www.city.kawagoe.saitama.jp/)

＊⑥は、合格決定後、速やかに提出してください。

申し込み…平成31年1月4日(金)～31日(木)〈厳守〉に教育総務課(市役所東庁舎2階)へ直接持参してください。

＊貸付決定にあたっては、審査があります。申請された方全員に貸し付けが決定されるとは限りません。

区　分	貸付金額		
学資金（月額）	高等学校	国公立	13,000円
	中等教育学校（後期課程に限る）・専修学校	私　立	20,000円
	高等専門学校		16,000円
	大学（短期大学を含む）		30,000円
入学準備金	高等学校	国公立	150,000円
	中等教育学校（後期課程に限る）・専修学校	私　立	280,000円
	高等専門学校		160,000円
	大学（短期大学を含む）		360,000円

変わる大学入試　～2020年度からセンター試験に代わる試験を実施～

現在、グローバル化の進展やAI(人工知能)技術をはじめとする技術革新などに伴い、産業構造や社会構造が急速、かつ大きく変化しています。このような状況のなかで、「知識・技能」「判断力・思考力・表現力」を持ち、かつ、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ姿勢が重要であるとされてきています。

大学入試においても、これまで以上に多面的・総合的な評価を重視する方向性が示され、「思考力・判断力・表現力」をより重視した「大学入学共通テスト」が導入されます。

【いつから】

今の高校1年生が大学受験に臨む平成32年度(2020年度)から、大学入試センター試験に代わる新たな共通試験「大学入学共通テスト」が始まることが文部科学省から公表されています。

【何が・どのように】

「大学入学共通テスト」では、国語と数学の一部で記述式を導入すること、英語4技能「読む」「聞く」「話す」「書く」を測るために、民間の資格・検定試験を利用することなどが検討されています。

＊「大学入学共通テスト」の詳細はまだ検討中です。平成31年度(2019年度)初頭を目途に実施大綱のほか、適切な時期に順次公表される予定ですので、今後の動向を見守っていく必要があります。

知っ得 文化財 第40回

知って ちょっと 得意になれる！

このコーナーでは、子どもたちにわがまち川越のことを知ってほしいとの思いから、川越の文化財をわかりやすく紹介します。

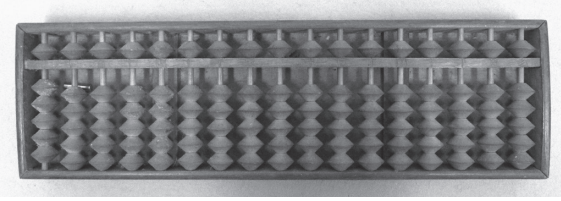
「身近な文化財」

「文化財」というと、国や県・市が歴史的・文化的に価値のあるものを「指定」した「指定文化財」をさすものと思われていることでしょう。平成30年6月、文化財保護法が改正され、これまでの「指定文化財」だけでなく、未指定の文化財にも目を向けていこうという内容が加わりました。

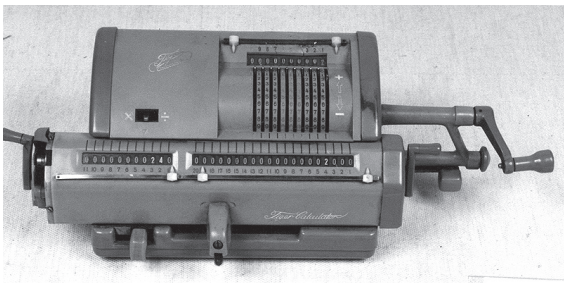
私たちの生活の中には日本人の歴史・文化に根差した「有形」・「無形」のものがたくさんあります。しかし、その多くは時代とともに失われていき、今後その傾向は更に進むものと予想されます。

みなさんは計算をするときに、何を使いますか。暗算でできる程度ならよいですが、10桁どうしの掛け算だったら。どうしましょう。

先人たちはさまざまな計算道具を発明し、使ってきました。算盤は15世紀初頭には中国から伝えられていたとされ、江戸時代には広く使用されていました。明治になると、フランスから「計算尺」が持ち込まれ、逸見治郎によって国産化されて普及しました。ほぼ同時期に矢頭良一は森鴎外が所有していた「機械式計算機」を模して、「自働算盤」を発明し、複雑な計算が簡単にできるようになりました。



▲算盤は電卓が普及するまでの代表的な計算道具機



▲「自働算盤」の普及版「タイガー式計算機」

▲1964年、約10万円で発売された電卓

時代は進み、1960年代には重さが20kgを超える大型の計算機にはじまり、1970年代前半には1kg程度の小型の「電卓」になり、1980年代にはカードサイズの電卓も販売されました。現在では多くの方が携帯電話やスマートフォンに組み込まれた電卓アプリを使うことでしょう。あるいはスマホに話しかければ答えてくれるかもしれません。

道具は、使う人にとって便利で簡単な方がよいに決まっています。現在、計算尺や自働算盤を使える人はさほど多くありませんが、より早く、容易に計算できるよう研究・開発した人々や完成した製品は、指定文化財ではないものの、いずれ私たちのくらしを語るうえで、歴史的・文化的に価値あるものとすることができます。これは計算道具に限らず、さまざまな道具も同じです。技術が進歩していくなかで、失われていく技術や道具があります。これらの記憶も私たちにとっての貴重な文化財であり、後世に伝えていくべき財産なのです。

★画像の資料はすべて川越市立博物館蔵